

産主義運動への彼らのかかわりといった事柄以上のものが暗示されるのは、ソヴィエト秘密警察によってPOUMのリーダーたちが組織的に殺害された場にもそれ相応に「ユダヤ人」がいたということだけである。

スペインにおけるスターリンの犯罪は内戦の一部を構成する不可欠の物語であり、軽視されえない。その問題にもかかわらず、左翼の人びとは国際ファシズムに対する世界的闘争を闘い抜き、死んでいった。それは折しも労働シオニストがパレスティナへアイヒマンをゲストとして迎え、親衛隊のためのスパイ活動を申し出ていた時であった。

## 第18章 自由民主主義政体におけるシオニズムの 反ナチ闘争の敗北

### シオニズムとイギリス・ファシスト同盟

一九三三年のヒトラーの政権掌握以後、西欧においても親ナチ的運動の台頭を見ないところは皆無であったが、その影響の程度は国によって異なっていた。西側資本は、共産主義体制が出現するよりはナチ・ドイツのほうがまだましであるとしていたが、ムッソリーニに比べそれほどヒトラーには支持を与えていなかった。ヒトラーがヴェルサイユ条約に対しあまりにも復讐主義的な態度を示し、ドイツそのものが再び強国になるおそれも強すぎたから、この最も新しい救世主ヒトラーに対する資本家の態度は、ますますはつきりしないものにならざるをえなかったのである。さらにヒトラーの反セム主義は資本家には不人気であった。ユダヤ人が西欧各地の社会でごく小さな分子でしかなければ最終的には同化されると資本家たちは考えていた。東欧からの大量の移民は西欧における反セム主義の息を吹き返させ、英米支配層の間にも五〇年前より偏見は強まっていたが、ヒトラーの極端なレベルにまで達することはなかった。にもかかわらず、イギリスもアメリカも大不況期になると、ユダヤ人社会を肉体的物理的におびやかす、相当な反

セム主義の運動の台頭を経験したのであった。

イギリスで脅威となったのは、オズワルド・モズリー卿とイギリス・ファシスト同盟(BUF)であった。イギリス・ユダヤ人議員委員会は、この脅威を無視することで事態をくぐりぬけようとした。はじめから委員会は、モズリーの集會にわざわざでかけて挑発などしたりしないように、と注意した。リーダーたちは、ファシストに対してユダヤ人のほうから喧嘩をふっかける必要はないとしていたのであった。この組織の総裁でユダヤ機関の行政委員長のネヴィル・ラスキも「イタリアにファシズムは存在するが、その体制下五万人のユダヤ人がイタリア人と仲良く安全に暮らしている。……政治組織ではないユダヤ人共同体はファシズムとの衝突にまきこまれてはならない」という点を強調した。<sup>(1)</sup>イギリス・シオニスト連合は「若きシオニスト」の一九三四年八月号における関連論説でラスキの立場を支持した。イギリス共産党と独立労働党は積極的にモズリー派と街頭で闘いを交えており、少なく見積もっても一万二千名が、六月七日のイギリス・ファシスト同盟オリピック大会会場のまわりで敵対的デモを展開した。また九月九日にはハイド・パークで抗議する二万人から、ファシスト三千人を護るために六九三七七人の警官が出動する事態にもなった。イースト・エンドのユダヤ人共同体は、イギリス・ファシスト同盟支持者から自分たちを護ってくれるのは共産党であると考えていた。シオニストでも青年組織の間には、反モズリー運動に参加しようという空気が強まっていた。しかし、シオニスト指導部はこうした動きが現実のものとなつてはならないと決め込んでいた。もしユダヤ人がモズリーおよびファシスト同盟と闘って勝利でもしたらどういうことになるか、というのが彼らの懸念だったのである。

反ファシズムの人びとに対する報復がなされているファシスト体制下ではすべてのユダヤ人が苦しま

ねばならなくなるとしよう。そうなると「我々はファシズムと闘うべきなのだろうか」という問いがもう一度立ちはだかつてくる。……この間すべてのユダヤ人の支持を得るためと声を大にして求むべき三つの理念が存在する。第一は、ユダヤ民族の統一。第二は、ユダヤ人の誇りを一層強化する必要性。第三は、エーレツ・イスラエル(パレスティナのユダヤ人国家)の建設。そして我々はいえ、反ファシズムの団体にほんとうに参加すべきなのか、疑いながらも、ぐずぐずしているのだ。<sup>(2)</sup>「青年シオニスト」

次の結論は、この問題をより「徹底的かつ誤りないように」言い直したものだという。

我々が悪を根絶できないこと、我々の努力がこれまで無駄であったことを一旦実感してしまえば、その悪名高き疾患の突発から我々を守るためにあらゆることをなさねばならない。反セム主義の問題は我々自身の教育の問題になる。我々の防衛の本質的課題は我々ユダヤ人一人ひとりが強くなることである。

実際にはユダヤ人大衆は、こうした受け身の態度を勧めるシオニストの勧告をほとんど無視して共産党を支持した。最終的にはシオニストの立場は覆され、彼らの中にはユダヤ人民評議会(JPC)と呼ばれる共同体防衛組織に参加する者もでてきたが、反ファシズムという課題は、シオニズム運動にとって何より優先すべきものとはならなかった。

一九三六年一月四日、ユダヤ人や左翼合わせて一〇万人が集まる中、五千人の警官が出動してイギリ

ス・ファシスト同盟の行進を強引に通過させようとして果たせなかった有名なケープル・ストリート（ケープル・ストリート）の闘争が、反モズリーの転換点となった。当時最もすぐれたジャーナリストのひとりで、なお当時はシオニストであったウィリアム・ズーカーマンもその場に居合わせ、ニューヨークの『ジューイッシュ・フロンティア』に次のような報告を寄せている。

デモの企てでこれほど目立つようなシーンは非英語圏の町ではかつて見たことがない。私同様この出来事に参加させてもらう幸運にあずかった人は、けっしてこの出来事を忘れないであろう。というのも、これは人民大衆の偉大な連帯行動のひとつだったからである。深い感受性、あるいはまた正義を求める怒りの感情によってひきおこされた、まさに歴史を創造する出来事であった。……イースト・エンドのユダヤ人による、まさに壮大な反ファシズム行動だったのである。

ズーカーマンは、「シナゴーク、親睦団体、ドイツ・ユダヤ人会」を含むユダヤ人民評議会によってデモの呼びかけがおこなわれた、と報告している。ユダヤ人の退役軍人もデモに参加していた、という。続けて「モズリーのファシシヨ的反セム主義に対して最も果敢に闘う闘士として共産党と独立労働党が、このデモの功績者とみなされねばならない」とも書いている。とりわけ地方のシオニストが、そこに参加するものと考え、また、その場にいたにちがいないとズーカーマンは思っていたのであるが、重要なのは、このデモにシオニストがいた、とは、ズーカーマンが述べていないことである。ギゼラ・レープツェルター著『イギリスの政治的反セム主義、一九一八〜一九三九年』は、シオニストが一九三六年七月二六日のユダヤ人民評議会の設立総会に出席した、と述べているにすぎない。この女性研究者は、その後数年間続いた

運動においてシオニストがひよつとしたら重要な役割を果たすことになったかもしれないともまるで触れていない。レープツェルターは、ズーカーマンの評価を確認し、共産党の主導的役割を完全に認めている。当時のイギリスのシオニズム運動は、力のないものではなかった。一九三三年から一九三六年にかけて六四三名の入植者をパレスティナへ送っている。街頭闘争においても抜きん出た役割を果たせる力量を有していたが、実際にはユダヤ・コミュニティを防衛するためにほとんど貢献らしい貢献をしなかった。一九三四年の立場を放棄したあとでさえそれは変わらなかった。ケープル・ストリートの闘争、すなわち何より共産党・独立労働党によって指導されたユダヤ人の抵抗こそが、イギリス政府をしてイギリス・ファシスト同盟の「権利」保護を中止させ、最終的には制服の私的部隊を禁止させたのであった。

#### シオニズムとドイツ・アメリカ同盟

アメリカのファシズムの波も一九三〇年代を通じて高まっていた。南部では、伝統的なクー・クラックス・クラン（KKK）がなお強く、北部ではアイルランド人移民の多くが、フランコ軍のバルセロナ進軍の進展とともに、カフラン師の権威ファシズムに染まっていた。イタリア人移民も組織されたファシズムのパレードをまのあたりにし、ドイツ人移民組織も、ナチスの息のかかったドイツ・アメリカ「同盟」の影響下におかれた。反セム主義も強力に増殖し、一九三九年二月二〇日のニューヨークのマディソン・スクエア・ガーデンにおける集会を告知しつつ、その新勢力のほどを誇示しようとした。他の集会も続いてサンフランシスコとフィラデルフィアでおこなわれることになっていた。ユダヤ人はこれにきちんと応対したであろうか。

ニューヨークのユダヤ人は少なくとも一七六万五千名を数え(ニューヨーク市民の二九・五六パーセント)、近郊の近郊外地区を含めればさらに数十万名がこれに加えられる数になった。しかし、対抗デモを組織しようと考えたユダヤ人組織はひとつもなかったのである。むしろ右翼アメリカ・ユダヤ人委員会の場合は、スクエア・ガーデンの管理部に書簡を送り、ナチスが集会を開く権利を支持させた。ただひとつ、社会主義労働者党(SWP)というトロツキストのグループだけが対抗デモ敢行の要求を出したのであった。SWPは、党員が二、三百にすぎない小党であったが、この行動のオルガナイザー、マクス・シヤハトマンが説明しているように、党が代表している小歯車を、ニューヨークの戦闘的労働者が代表している大歯車に噛み合わせることをこの党は十分心得ており、かくして大歯車を動かしたためである。市民がSWPのデモに気づいたとき、ニューヨーク市は市警察がナチスを攻撃から護ると告知し、報道も暴力沙汰の可能性を強調し始めた。

当時シオニズムと同一視されていた二つのイディッシュ語日刊紙が存在していた。ひとつは『デア・トールク』(編集人のひとりにはエイブラハム・コラルニク)で、反ナチ・ボイコットの時の主たるオルガナイザーであった。いまひとつの新聞は『デア・ジュルナル』で、経営者のヤコブ・フィツシユマンは、アメリカのシオニスト機構創設者のひとりであった。両紙ともナチスがニューヨークで公に姿を見せるのに抗議する行動には反対であった。『デア・トールク』紙は読者に懇願した。「ニューヨークのユダヤ人は、自分の難儀に引きずられないように！今夜はマディソン・スクエア・ガーデンにはでかけないように。ホールに近づかないでほしい！ナチスに宣伝のチャンスを与えてはならない。そうなればナチスの思うツポになるだけだ」。一方『ジュルナル』の説教調子については、SWPの週刊紙『社会主義者の訴え』が、右の『トールク』の言葉に、吐き気を催させるようなラビの敬虔主義の味を加えたもの、と評した。シオニス

トの組織の反応はどれもはや戦闘的なものではなかった。衝突の準備をしている間、トロツキストの若者の一グループは、ハシヨメル・ハツアイルのローワー・イースト・サイド地区の各司令部に行ってみたが、「我々はあなた方の行動には残念ながら加われない。パレスティナ以外の政治にはかかわらないというのが我々シオニストの政策である」といわれた。

その当時ハシヨメルはシオニズムの左派たることを自認していたが、わずか一〇カ月前にハシヨメルの雑誌は、自らの不参加主義政策の立場を以下のように擁護していた。

我々は、ユダヤ人としての立場と社会主義者としての立場とを切り離して考えることなどできない。前者の条件の安定化・正常化を、後者の条件のための活動の必要な契機と位置づける。……したがって、真のプロレタリアートの立場に立脚せず、いわば「上から」語りかけるブルジョアとして、すなわち基盤を欠いた不安定な分子としてしか参加できない社会主義の活動には加わらない。この態度は、いつもの「ラディカル」な組織による法螺吹き、デモンストレーション演出、空想的プログラムを要求しているのではない。我々は本質的に非政治的であり、またそうでなければならぬ。

五万人を超える人びとがマディソン・スクエア・ガーデンに集まってきた。そのほとんどはユダヤ人であったが、全部が全部ユダヤ人だったというわけではない。世界黒人地位向上協会の人びと、マルカス・ガーヴィの民族派の支持者たちが、ハーレムから駆けつけた。アメリカ共産党は、トロツキストに対する憎しみと、ローズヴェルト支持派市長フィオロレ・ラ・ガルディアに対する支持(ニューヨーク市警は同盟を護衛)の立場から、デモ支持を拒否したが、さまざま民族から成る一般庶民の人びとが実際に集まっ

たデモだったのである。一七八〇名の武装警官部隊の分遣隊の一翼の騎馬警官が反ナチ・デモ隊の中に繰り返し突っ込んだので、地区一帯は五時間にもわたる凄惨な闘いの舞台となった。反ナチの人びとは、警官隊の阻止線を突破できなかったけれども、まちがいなく勝利は彼らのものであった。警官隊がその場にいなかったら、二万人のナチスとカフタン信奉者たちはおそらく袋叩きに遭っていたであろう。

SWPは、ただちに反応して、二月二八日のロスアンジェルズにおけるドイツ会館内「同盟」集会場に赴き、再度のデモを呼びかけ、ニューヨークでの勝利の余勢を駆ってさらに徹底的なものにしようとした。五千人を超える人びとがホールの中でファシストを拘束し、警官が救出に駆けつける騒ぎとなった。同盟の攻勢もやがてストップし、全く面目を失ってしまい、その後には予定していたサンフランシスコ、フィラデルフィアでの大会もキャンセルするにいたった。

一九三九年二月になって、ニューヨークの突撃隊の集會に反対するデモをSWPだけが呼びかけていたという事実は、ナチの時代のひとつの現実を証示する。すなわち、個人としてシオニストは、スクエア・ガーデンの闘いに参加したが、ユダヤ人組織（宗教組織あるいはまた政治組織）のどれひとつも敵と闘う用意をしていなかったのである。

## 第19章 シオニズムと日本の「大東亞共栄圏」

一九三五年当時、中国には一万九八五〇名のユダヤ人がいた。上海にユダヤ人街がひとつ、満州にもいまひとつ存在した。上海はイラク出のスファルディ、エリーアス・サスンとその社員の末裔によって支配されていた。彼らは阿片戦争以後商店を開設し、都市上海の発展の中で信じられないような巨万の富を築くにいたった。満州ハルピンのコミュニティはロシア出身のユダヤ人によって構成され、ツァーによる東清鉄道建設以降定住していたのである。その後ロシア革命と内戦による難民の到来によって膨れ上がることになった。

シオニズムは「アラブ人世界」では弱体であった。アラブ人たちは世界で最も富裕な民族コミュニティのひとつを形成し、その快適な生活を捨てる気はさらさらなかった。中国内のシオニストはユダヤ系ロシア人であった。彼らもまた帝国主義者たちのプレゼンスにとって不可欠の構成部分となり、中国国民になる形で同化することを望まなかった。資本家か中産階級だった彼らにはソ連への帰還も重要な関心事ではなかったし、彼らのアイデンティティは中国北部一帯にやってきた白衛軍傘下の反セム主義難民によって強化された。シオニズム運動の分離主義には持ち前の魅力があり、中でも改訂派が最大の訴求力を有していた。ロシア・ユダヤ人は帝国主義者や軍事化された環境に囲まれた商人で、ベタール運動は熱狂的な資

叢書・ユニベルシタス 705

# ファシズム時代の シオニズム

レニ・ブレンナー著

芝 健介 訳

